

京伝『夢のうき橋』紹介

山本和明

はじめに

文化四年八月十九日、深川八幡祭礼のさなかに、永代橋が落橋した。祭に集う多くの人々が溺死する古今未曾有の大惨事であったという。太田南畝、曲亭馬琴、屋代弘賢等々、当時の戯作者あるいは考証家達によってその惨状は様々に記録されている。同様に、その事故のことを記した一写本が存在する。執筆は戯作者山東京伝と弟京山。「国書総目録」未載。転写本ながらも、これまで知られていない資料である。ただ、京山「蜘蛛の糸巻」にその名を見ることができただけであった。

猶委しくは、此時、家兄の記されたる、夢の浮橋といふ写本の一冊子あり、今猶蔵す…

〔「蜘蛛の糸巻」(廿八)追加の項〕
永代橋落橋に際し、事故にあつた個々の嘆き、あるいは命拾ひした人々の喜びようを、見聞のままに記録したものである。そこからはこの惨事に際し京伝がどのように対したかが伺え、さらには妻百合に宛てた手紙も付され、興味深い資料といえる。今回、その翻刻を施し、あわせて若干の考察を試みることにしたい。

※

※

まず、その書誌的概要を示しておく。

大阪府立夕陽丘図書館に所蔵(請求No二一〇・Y六)される『夢のうき橋』は、半紙本(縦三三・七釐×横一六・〇釐)一冊の写本。装丁は袋綴。薄香色紗綾型文様の表紙に、左肩無辺白地に松を描いて「山東京伝□□/夢のうき□□全」と貼題簽が付されている。丁付は記され、全二十五丁。印記は一丁表に「大原社会問題研究所図書館」「大阪府立図書館」の印があり、それに従えば、大正十二年十月二十三日に大原社会問題研究所図書館が購入したことがわかる。

詳しい内容は翻刻本文を参照いただくとして、後の考察のために、簡略ながら本書の構成を次にあげておく。なお、ローマ数字による分類は、後の考察のための便宜上の区分けである。

- I 幽篁庵祐之の序 (1表〜2裏)
- II a 扉題「夢のうき橋」 (3表)
- 挿絵〈永代橋陥落の図〉 (3裏・4表)
- 白紙 (4裏)
- b 京伝による永代橋陥落に関する見聞 (5表〜12表)
- 白紙 (12裏)
- 京伝の妻百合への書簡等 (13表〜14表)
- 白紙 (14裏)
- 深川八幡宮御祭礼番附 (15表〜17表)
- 文化四丁卯曆 (17裏〜18裏)

京伝跋文

(19表)

c 京山による永代橋陥落に関する記事 (19裏、24表)

白紙

(24裏)

III 無茶空庵醒文による識語

(25表・裏)

資料翻刻

【凡例】

※底本の文字は通行の字体を用いて表記した。

※特殊な略体・合字等は現行の字体に改めた。

※丁うつりは底本に従い、各丁末に「で示し」丁数を付した。

※〔 〕は翻刻者が施したものである。

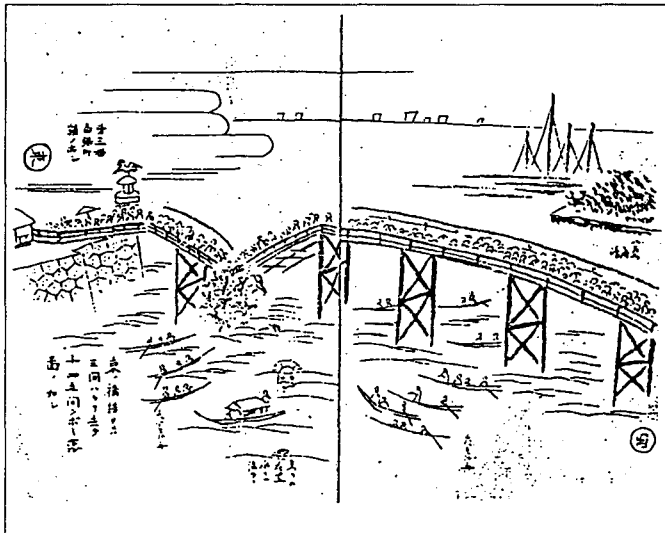
夢のうきはし

まことやいにし秋の半はうかねるふ富かをかにしつまいりま
す広幡の八はたのみ神のまつり見むとて老たる若きをとこをみな
のけちめもなくよりこそりてさとひ名永代橋とかいへる橋のうへ
につとへる折しもいかなるまがにか此橋なか

はよりくづれおちあまたの人々あはれ水くづと消行しはいともは
かなき事になむそはふるき人の物かたりにのみほの聞つるを今こ
の翁の物せられしひと巻は昔をしのふ夢のうきはし夢の橋なるま
がわざのまのあたりなる心遅してみるく

「1ウ

〔白紙〕



「4ウ

にもかゝる心しらずはあらましくてあまねく人に見せまほしかり
なむ

聞わたる神裳無けき秋の望

ありし昔の夢のうきはし

幽篁庵枯之誌

夢のうき橋〔扉題〕

〔挿絵〕

「3ウ4オ

「3オ

「2ウ

「2オ

文化四年丁卯秋八月十五日深川富ヶ岡の八幡祭礼十三年ぶりにて執行あり神楽齋固の者共花麗にいであつよし其沙汰もつはらにてかれもゆきて見んこれもゆかんなど婦人子供等いひの、しりて当日のいたるを指をりてまちわびぬしかるに十四日雨天なるによりて十五日の祭礼のびて十九日になりぬ十八日も雨天にて見物の諸人力をおとしけるに十九日にいたりて快晴なりければ明七ツ時ごろより諸見物四方より出て我もくと深川の方へゆきぬ南は品川芝京橋日本橋にいたり西は麻布赤坂市ヶ谷麴町四ツ谷或は本郷丸ノ内北は浅草橋手前までの諸見物総皆永代橋を越て深川にいたりぬしかるに永代橋此時かり橋なりけるがいく万人といふ数を知らずあちおしこちおしひしめきあひて渡りけるにそ其日の四ツ半ごろ東の橋づめよりこなたへ三間はかり去て橋桁

霊岸橋しろかね町鶏のだし橋を通るとたゞちにくづれおちけるとぞおれくじけ十四五間はかりくづれおち見物の
— 5ウ
諸人将棊たふしにたふれていやがうへにかさなりあひて水中におち入橋のくづる、音前後の人の逃さくる足のひゞきあまたのいかづちのなりはためくがごとく諸人のおめきさけぶ声天地もくつる、かと思ふはかりにありけるよしおよそ千人ほど水中におち入たるかたすけ舟にたすけられたる者おほく死亡人三百人におよぶぬ誠是古今未曾有の大凶事なり此日は是いかなる日そや暦をうつして左にあらわす
— 6オ

文化四年丁卯

八月大建己酉危宿参水よう

十九つちのへねたいら

火

社日大くわ地火けんふくよし

京伝「夢のうき橋」紹介

廿一日に人のかたるをきけは二百九十三人死骸あかり遠く流れうせたるもあまたありと云いやかうへにかさなりおちたるうへに橋板橋桁などおしになりたれば泥中にうづもれてとり得かたき屍もありとぞ

○その日官よりかの橋ちかきあたりの船持共
— 6ウ
に命せられて其屍をとりあけさせ東の橋つめちかき空地にならへおきぬ礎をいくつもつらねて水中をかきそれにかけて屍をとりあげけるとぞ数おほき屍なれば老人はかりあつめ男女をわかちならべおき若人は若人はかりあつめて男女をわかち小児は小児はかり集めて男女をわかち武士町人をもわかちみよりの者の尋ね来し時はやく見わくるに便りよきやうになしおきぬ三百人にちかき屍なれば左もあるへき歟後には番付の札をつけておきけ— 7オ
るとぞ

○その日祭礼を見物に出たる者およそ一町のうち家数百軒あれは九十軒は見物に出たる家なりされはその日橋のおちたるといふ沙汰を聞やいなや生死いか、と氣づかひてもすそをか、げわらぐつはきてはしり行もあり泣ながらはしるもあり家にのこる者はその便を聞かざるうちは色を変して門に立ち安き心の者は一人もなかりけり

○けふをはれとよそほひいてたちたる見物の
— 7ウ
人々なれば女子などは面に紅粉をいりとり頭に挿笄さしかさし衣服のたくわへなき者もかり着してとりかさり子ともは花笄いる元結頭にかさりたるが少しのうちに死亡したることなればいまた紅粉もはげおちす髪のかさりさへそこねすありしま、にてよこたわりたるさま目もあてられすげにも哀れの事なりけりおもふにかの橋のくづれおちんとはおもひもはからす前夜より寝もやらで髪ゆ

ひ化粧し或は親子つれたち或は夫婦つれたち殊に子ともは「8才うれしみ喜び片時もはやくゆきて見んと道ゆく人をかけぬけてさきをいそぎしものもあるへし皆是死出の旅路をいそぐとはおもはでかかる非命に死せしとおもへは我身にあつからぬ事ながらよその哀れとはおもわす悲歎にせまりてはらわたをたつこ、ちすなり

○それがしの町八百屋とかや兄弟三人の子を持たるもの祭礼に子共三人ともにいだせしがいろ縮紗の衣服着がざりたるまゝに死亡せしとぞすゑの子は年わづかに四才とそその母狂

「8ウ

氣しつるとそ何かしとかや酒ひさく家にて親子夫婦召仕都合七人死亡せしもありおさな子をいなきながら死し居たるもあり一人として哀れならざるはなし予かむかひの家にも老父一人死すしりへの町にて妻と家童と死し婢女のみ橋のおはしまにとりつき生のこりてかへりたるもあり或ははやく越て命まつたきもありおくれ命ひろひたるもありはやく死せしもありおそくて死せしもあり親子婢女三人ともに水中におちいりたるかいか、してか命」9才たすかりてかへりたるもありわづか五歩十歩にして生死をわかつそのあやうさをかたるさへ身の毛もいよたつはかりなり幸ひにして予か家内親類相知れる人のうちには死亡の人一人もなく相知れる人のうちにもわづかの運速にて命たすかりたるはある也

○かの橋おちてのちは大橋おほしもかり橋にてよわくしきゆへに往来をとめて通路なし

その日深川舟とめて舟の通路なかりしゆゑに皆両国をさしてかへりぬ

「9ウ

祭礼もこれか為にやみて諸人のかへり道みな両国橋へさしか、りてかへりぬよりて深川高橋万年橋の二橋を皆わたりけるゆへこれらもみなあやうく見へおしあひて町々小路すべて人にてうづみ鑑

をたてべき地もなく両国橋さへゆれうごきけるとぞ

深川はすへてちまたせまきうへに祭礼のだし引物牛車など所せく立ならひたるうへに江戸の人四分一は深川立入たるゆへにいやがうへに人かさなりておしあひ足は地に

「10才

つかすもみあげられたる人おほくふり袖をちきられ子をうしなひみぞへおち入りて死したるもありこれらはかの橋のわざはひの外の災なり神輿かたふきたふれておしころされたる人もあり

棧敷のくづれおちて身うちをやぶりたる人もありとぞ

○かの日の夕かたより夜とほし提灯ともしつれてむかひの人ひきもきらす通りけるか翌日昼過よりしかばねをひきとりかへるものおほく或はかめに入れ或ははや桶に入れ小兒など

「10ウ

は御膳籠といふものに入れたるもあり

かの橋の前後十四五町四方の棺をひさく家はや桶をうりつくしつるときく

八ツ口の見ゆる小児の衣服のぬれたるをしほりたるまゝにてそのうへにつけてかたけ大勢つきそひてもちゆくこれを見る人あなむざんやとて涙をおとさぬはなしさるほとに廿日にいたりては死亡の人をかなしみて泣家ありからき命をひろひかへりていはふ家ありその幸不幸によりてなきつ笑ひつかしかまはしはかり

「11才

なり

親をうしなひ子をころして狂氣せし人おほしときく

○廿日の朝にいたりては屍うかみなかれてつくだ嶋へおほくつき或は品川辺へなかれよりたるもあり屍を見わけに来る人みな半狂乱にてそれと見あたるはその屍にいだきつきかへらぬくり言ひひて泣くさま目もあてられずその事にか、はりたる人まぶたのはれさるはなしとき、ぬ

「11ウ

竹のさきに死したる幼子の衣服をかけその屍のまくらがみにたておきて遠目からもはやく見わかるやうにせしもありとそきくほどの事みなあはれなり

以上見聞する所ありのまゝに記しおきつ
〔白紙〕

— 12才
— 12ウ

予か家にも妻百合娘鶴召使半助金八兩人を具して彼祭礼見物に赴つるが大幸高運にして朝五ツ時前家を出て半時余はやく彼橋を越たれは恙なく販宅しつされと其安否を聞かざるうちは一時はかり心をいたぬ其時家僕をして妻のかたへつかはしたる書簡を左に貼して後日のいましめとす

— 13才

おゆりどの

伝蔵

メ ぶじよふ候

永代ばしおち候

よし

き、およびあんじ候間

人つかはし申候

かへりは

よくくみあはせ

人のすけ

なくなりし時

りやうごくを

御かへり 可被成候

大はし

京伝「夢のうき橋」紹介

永代ばしは

御むやう

なされて候

以上

みなく様へ御礼

よろしく

〔白紙〕

〔15才〕17才：深川八幡宮御祭礼番附

文化四年丁卯 十四日雨天二付

十五日ノ祭礼十九日ニ延ル

八月十五日

深川八幡宮御祭礼番附 板元 本屋

八丁堀七軒町 与七 富五郎

初	引物 りうくうの出し かめ浦しま はななこ乙姫	龍の出シ 引物 花かご 船つくり物 舟たこ	なます出シ とりぬしん木 引物	佐々木出シ 引物 よりとも	岩戸出シ ねりこ大セイ
一	さん時出シ ねりこ 頼光四天王	龍のしんきろう かめ二さる 花かご 船つくり物 舟たこ	なます出シ とりぬしん木 引物	佐々木出シ 引物 よりとも	岩戸出シ ねりこ大セイ
一	さん時出シ ねりこ 頼光四天王	龍のしんきろう かめ二さる 花かご 船つくり物 舟たこ	なます出シ とりぬしん木 引物	佐々木出シ 引物 よりとも	岩戸出シ ねりこ大セイ
初	りうくうの出し かめ浦しま はななこ乙姫	龍の出シ 引物 花かご 船つくり物 舟たこ	なます出シ とりぬしん木 引物	佐々木出シ 引物 よりとも	岩戸出シ ねりこ大セイ

挿絵省略

— 14才

京伝「夢のうき橋」紹介

六	引物 梶原ノ出シ あひら ねりこ大セイ	五	引物 仁田四郎出シ いのし、ねりこ大セイ	四	頼朝ノ出シ 引物 しんきろう ねりこ大セイ	三	引物 松梅 三しゆ 神宝 ねりこ 柴はやし	二	引物 龍神 かけん ねりこ 大セイ	一	宿祢ノ出シ 引物 正五九日人形 花かご	永代	向 霊岸 嶋ノ部	三十	蓬萊出シ 引物 太神楽道具 木バ丁 ねりこ 頼光山入	二十	引物 やぶさめ 黒馬 舎人	一十	宿祢出シ 引物 花かご玉 神くうごうくう てこまへ	十	和藤内出シ 北川丁 おく川丁	九	引物 三才むま 大つま	八	御所車出シ 引物 たい ねりこ ひいな	七	ねりこ大セイ むさしの出シ もろ丁	六	ねりこ大セイ とみ吉丁	五	引物 たご ねりこ大セイ
---	------------------------------	---	----------------------------	---	--------------------------------	---	--------------------------------------	---	-------------------------------	---	------------------------------	----	----------------	----	---	----	------------------------	----	---------------------------------------	---	----------------------	---	-------------------	---	---------------------------------	---	-------------------------	---	----------------	---	--------------------

此篇の
だしの
橋を通る
とつれおち
けるとぞ
そのゆへに
警固ノ者
小兒ナト
死多シ
トタキ

〔17ウ〕18ウ…文化四年丁卯曆

千秋万々歳大々叶

文化四丁卯曆

風	大風	雨	晴	雨	晴	雨	晴	曇	雨	雨
八月	大建己酉	危宿参	水	よう	土	金	火	水	土	金
一日	かのへむまひら	ふく日天	火	火	土	金	火	水	土	金
二日	かのとひつしと	二百十日	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
三日	みつへのさるた	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
四日	みつのとりのそ	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
五日	まのへいぬみつ	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
六日	まのといみつ	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
七日	ひのへないら	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
八日	ひのとうしきた	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
九日	つらのへらと	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
十日	つらのとうや	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
十一日	かのへたつあ	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん
十二日	かのとみな	神よし	大みやう	母倉	大みやう	天おん	大くわ	大みやう	大みやう	天おん

七	戸がくし出シ 引物大す 南しん堀丁 ねりこ大セイ
八	頼義ノ出シ 引物 とみが岡 かぶと大刀 長さき丁 ねりこ大セイ
九	くま坂出シ 宝つくし 引物 よしつねぶ くじら 舟二もり うさぎ みなと丁 川口丁 ねりこ いろく 大セイ

此日雨下
リヨリテ
十五日ノ祭
延ス
祭札
定日
雨
晴
晴

十三	みつのへむおさん	木	大みやう天おんめつもん
十四	みつのとつしひらく	●	十方くれに入大みやう竹木こりよし
十五	きのへきとつ	水	月とくかく日天火らうしゆく下しきむまの時
十六	きのととりたつ	土	母倉五む日ちいみ
十七	ひのへいぬのそく	大みやうちう日	
十八	ひのといみつ	杜日天くわ地火けんふくよし	
十九	つらのへなたいら	ひかん二なる母倉つめとりよし	
廿	つらのとうしきたん	月とくきこやたてつめとりよし	
廿一	かのへとらとつ	初刻日の出より日入まで 秋分六より六まで 半餘十五期半 廿四十五期半	
廿二	かのとうやふる	ふく日	
廿三	みつのへたらあやふ	さいてき大みやう母倉五む日わうまう	
廿四	みつのとみななる	天一天上十	
廿五	きのへむおさん	めつもん田かりよし	
廿六	きのとつしひらく	●	神よし竹木こりよし
廿七	ひのへきとつ	天火らうしゆく下しきむまの時	
廿八	ひのととりたつ	母倉ちいみわたましふねのりよし	
廿九	つらのへいぬのそく	ちう日	
卅	つらのといみつ	木	

是天災にあらずおの／＼みつからもとめたる災なりゆめ／＼危に
ちかつくへからす後年のいましめにしるしおくのみ

文化四年丁卯秋八月

京伝(巴山人印)

19才

此頃予は浪居して中橋に在り家に夫婦と五歳の娘と下女と老僕と
在りけり近隣の人々杖を連ねて八幡の祭礼を觀に行しもの多かり
其中には溺死せし者も許多ありぬ神田弁慶橋に住る書肆問や丸屋
の手代治助といへる者常に予が家に來りて親しかりしさて此日の

京伝「夢のうき橋」紹介

前日治助來りて云やう明日は主人の妻と娘とに随ひて祭り觀に參
る也同伴し給へ觀に參る所は主人の親類也氣づかひ玉ふ処にはあ
らず御供申さん行き玉へと妻にもしきりにす、めしか予も「19ウ
妻子らも行んとおもふ心さらになかりしゆへ同伴せざりしに後に
聞けは右のものとも永代橋にさしか、りしは朝の四ツ過なりしに
此時一ツ橋殿の御坐船永代橋の下を過らんとするゆへ橋役の者は
を見て空船ながら高貴を重んじ板に繩を橋に張りて往來を停しゆ
へ渡らんとせし人望みを失なひ口々に恨み罵りつ、幾千人こゝに
群り肩は肩を摩り足は足を躍て錐を建べき処もなくかの御船の通
るを待たびけるにしばしありていざ通るへしとて繩をひ」20才
きければ待たびたる幾千人同音に声を挙て橋を駈通る足音千雷を
なし巨涛岩を越の勢ひをなしけるに此橋は請負人といふもの、架
たる弱々しき橋なりしに幾千人の重きを載せ幾千人の足に踏れて
揺々とせしか一声響をなして橋の半より東の方七八間の処橋の梁
折て幾百人水中に落しは舂を傾けて豆の落るか如し跡に在りしも
のは是を知らずして強て進まんとするゆへ断橋の足下に在る者ど
も跡の人に推落されたるも許多在りしとぞ此時一人の武士「20ウ
刀を抜てひらめかしたるゆへ跡の者は是を遙かに見て恐れてす、ま
ず頓智の一刀を以てあまたの人の命を助け己も推落さるゝを脱れ
て危き命を助かりしとそいかなる人にや在りけん臨機の智計賞す
へし感すへしさてかの書肆丸屋の妻は十二の娘と十九の下女とを
つれ治助を案内者として此時此橋に來か、りかの繩にと、められ
しうち下女を見失ひしゆへ治助これ尋る間に橋役の者繩を払ひ
たるゆへ丸屋か妻は娘の手をとりてはなさず人に採たて」21才
られて治助をも見失ひて難なく橋をわたりしに治助は下女を尋ん
として二人の主人を見失ひ心周章し時橋上に白刃のひらめくを見

四一

て橋を渡らすかの妻と娘は心なく先んじて命助かり治助は下女を尋る為に後れて命落さず可憐下女は此時断橋に落て溺れ死けり予も治助がすゝめしに任せて同伴せは親子断橋の災の為に魚腹に葬られんも知るべからず行んとおもふ心なかりしは天幸といふへし件の一條は治助かものかたりしまゝを記す予橋落しと聞「21ウしゆへ頓に駈ゆきて断橋の図を写して家兄に見せ目前の形勢をもものかたりしか図は此書の始に顕はしたるか如し觀し処一ツとして肝を冷さざるはなかりしか就中哀れなりしは年の頃五十余りの男猪牙松の中に泣をそゝき松頭櫓を擡すかたに繩を以て死骸を松むりにくくし水中に死人を引くを見れば年の程は十六七の娘衣服もたゞならず面生るか如くしかも美女なりしか黒髪みたれ糸の如く綿の帯の半解けて浪に漂たるありさま目もあてられず松」22オ中に泣は此娘の親にやあらんと予もまた愁涙を一滴せり生者心滅のならひとはいひなからかゝる非命の死は無常の風の所為にもあるべからすその、ち尹府の記録として写したるを借りて一覽せしに此時死亡の者の住居名前も委しく記しありしかさのみはとて写しと、めす死亡通什の員をこゝに記す

文化四卯八月十九日深川八幡祭礼之節永代橋九間余落崩溺死人左之通り

- 一 侍八十六人 一 町人四百廿四人 一 22ウ
- 一 女百五人 一 男女子供七十六人
- 一 死骸引取人無之分拾壹人
- 一 死骸尋ニ参り候得共不知分百三十人
- 一 疵付候男女式百壹人
- 惣シテ溺死人八百七十七人疵付式百壹人

右者月番町を行根岸肥前守殿檢使之者書取之由溺死壹人別に住居

町所名前有之候得共略之

凡橋を架には土俵にて橋柱を揺入れ岩に当るを限として此柱を建るとそかの請負人といふ者は固利慾を旨とするゆへ此橋をか

ける時事を大概になして費をいとひたるゆゑ橋柱深く入らずしかるに幾千人橋の上を駈通る勢ひに橋ゆら／＼となして橋柱くへこみしゆへ橋の梁折て橋板凹み裂人は落ちかゝる時取付へき物もなく落ると知りなから落入たるなりとそ官府より御檢議の上橋請負人の落度たるにより首長の者三人流罪に所せらる

按に凡災の人を破る天変は人智を以て論すへからす人のゝる災は必ず其根元小より

いで、大に至る古今の通弊也件の断橋人を破りし災もその根元は一般の官松此橋下を過りし故一條の繩に幾千人を停め大群一度に橋を踏て駈渡りし故人力足に在りて踏所強く橋の力人に勝すして橋梁折たるならん因て思ふに出火の時も弱き橋を衆人渡らんとする時此断橋の事をおもひて心すへし後の龜鑑の為に茲に記して後人に示す

文化四年卯晚秋

京山人百樹識

〔白紙〕

一 24ウ

文化四年永代橋崩ヨリ今明治十六年間七十六年当ル八月十五日古勝ル大祭有タリヨテ深川靈岸嶋等美二花麗ノ花車沢山出来此見物古勝シ且花車等モ倍數シ当今ノ架橋等古キ架橋等見ル時ハ木ト鉄ノ違アリ且開化架橋幾万人渡レドモ此難ナク実ニ有難キニシるし

古く富賀岡八幡宮ハ源頼政是ヲ崇ミ其後千葉家写ル且足利尊氏へ
伝リ管領上杉氏敬シ太田道灌信ス寛永元年長威法印永代嶋二建立
スヨテ深川霊岸嶋等鎮府也茲ニ記して後昔ス

無茶空庵

醒文 「25ウ

成立過程一考

以下、本書成立の事情等について考察を加えたい。

今回、翻刻に付した夕陽丘図書館蔵本は25丁での識語(Ⅲ)
に示されるように、「無茶空庵醒文」なる人物によって書写され
た転写本である。無茶空庵醒文が何人たるか確認できていないが、
ただこの本を写すにあたっての事情は推察される。

識語には「開化架橋」といった言葉がみられるが、これは永代
橋のことをいったものではない。永代橋が鉄橋となったのは明治
三十年十一月のこと、転写段階ではまだ木橋であった(ただ、
鉄橋は明治四年竣工の新橋などで既に登場はしていたようであ
る)。識語の主眼はむしろ明治十六年八月十五日に七十六年ぶり
に深川宮ヶ岡八幡宮で大祭が催された方に重きをおいているので
あり、その時にあたって、過去の大事事を記したこの「夢のうき
橋」を転写したという事情が確認できる。

転写本であることは、筆が一樣であること、ならびに翻刻13丁
表の一節に「妻のかたへつかはしたる書簡を左に貼して後日のい
ましめとす」とあるが、貼付されていない事などが証左となろう。

Ⅲが後人の手になることを示したが、さらに、翻刻した内容に

京伝「夢のうき橋」紹介

至るまでに少なくとも一人の手を介していたことが想定され
る。それは序(Ⅰ)を記した幽篁庵祐之である。祐之自身につい
ては拙稿(「幽篁庵」の周辺(国文学研究ノート26号))で論じ
たのでそれをご参照いただくことにして、ここでは序文(Ⅰ)に
至る事情を考えるために、次の資料を呈示することにしたい。

○文化四年丁卯八月十九日、深川八幡祭礼の日、朝四時頃、
貴重御船永代橋の下を通ると、空船なれども、橋番人、
繩を橋のきはに引きはへて、人をとどめけるに(略)此時、
一人の武士刀を抜て、高くひらめかしければ是を見てあとへ
逃げかへりて、道を開きたり、此一刀にて、多くの人を助し
とぞ、此事世上にて蒼けるが、其名をいふ人なかりしを、今
年の晩春、幽篁庵の席上話此事におよび、おのれが見たる所
を語りしに、(見たるとは、橋落しとききて駆ゆきて見たる
なり)御主人(久松五十助殿)曰く、一刀を振しは南町奉行
組同心渡部小右衛門と云し者(傍注)半老の人なりと聞て、
其時にあひて四十年しらざりしを発明して、耳を新たにせり、
此人なくんば、猶幾人が溺死せん、無量の善根といふべし：
冒頭に引用した「蛛の糸巻」の一項である。祐之の邸宅「幽篁庵」
にて文化四年(一八〇七)の永代橋陥落が話題となったことが記
されている。「四十年しらざりし」というのだから、この幽篁庵
での会合はおよそ弘化四年(一八四七)前後であろうと思われる。
その話の内容からは、翻刻本文21丁表に記してあるように、永代
橋落橋の時、刀を振り回し人々を危難から救った人物のことを、
京山は知らず(「いかなる人にや在りけん、臨機の智計賞すべし
感ずべし」)、祐之に教えられているのである。とはいえず、「夢
のうき橋」序文に「そはふるき人の物かたりにのみほの聞きつる

を」とあるから、実際に祐之が惨事の現場に居合わせたわけではないことも判明する。このあとに、冒頭で記した京伝「夢のうき橋」の存在を京山は記しているのである。おそらく、京山の云うように兄京伝の記した「夢のうき橋」が存在しており、この会合で話題になったことが契機となったか、会合以降に、京山は祐之に貸与したと想像できる。それに幽篁庵は序文を付し、その転写本が無茶空庵醒文によって作成されたと考えてよろしかろう。ここで補足するならば、祐之は、戯作者京伝への興味ということでこの資料を収集したのではない点である。その著「近世事物考」をみても明らかのように、彼の興味は失われつつある風俗へ向けられているのであり、彼の考証癖のなせるわざであったに違いない。水野稔氏によって翻刻紹介された資料（「京伝洒落本の京山注記」『近世文芸』20）に、「幽篁庵の需に」応じて京山が当時の風俗などを注記したとあるが、同様に京伝の洒落本への興味というよりはその当時の風俗への興味からと想像されるのである。結果として、原「夢のうき橋」は、冒頭の構成におけるⅡが相応するものと思われる。そのⅡについて、成立過程を示す文面が「夢のうき橋」本文中に記されている。それを拾いあげるならば次のようになるうか。

京山が橋が落ちたと聞いて駆けつけ、Ⅱaにあるような断橋の図を描き、兄京伝に見せる（22表）。京伝は「文化四丁卯曆」「深川八幡宮御祭礼番附」などを資料として提示しつつ、見聞きした記録、さらには当日自分たちがどうであったかを妻子に宛てた手紙などを利用し描いたのがⅡbである。その完成は文化四年秋八月というのだから（19表）、永代橋落橋の当月である。京山も同じく幕府の記録などを利用しつつ、己れの家族のことなどを

記している。文化四年晩秋（24表）だから、京伝より後にⅡcの部分は完成したことになるう。

しかし、22表にある「図は此書の始に顕したるか如し」という言葉によって明らかのように、Ⅱaに描かれた永代橋落橋の図は、事故当時京伝に見せた図そのものではなかったとおぼしい。このことから、原「夢のうき橋」の成立として想像されるのは、まず京伝の執筆部分Ⅱbがあり、その上で京山がⅡa・Ⅱb部分を加えて成立したと考えられる。

以上のような成立過程が想定できる「夢のうき橋」であるが、派生する問題を一例あげておく。それは京山執筆の記事についてである。19丁裏から20丁表にかけての記事を、繰り返しになるが引用する。

神田弁慶橋に住る書肆問本丸屋の手代治助といへる者、常に予が家に來りて親しかりし。さて此日の前日、治助來りて云やう「明日は主人の妻と娘とに随ひて祭り觀に參る也。同伴し給へ。觀に參る所は主人の親類也。氣づかひ玉ふ処にはあらず。御供申さん、行き玉へ」と妻にもしきりにす、めしが、予も妻子らも行んとおもふ心さらになかりしゆへ同伴せざりしに後に聞けば：

祭の折に京山一家がどう過ごしたかを示す一節である。祭に誘われたが行かなかった旨の記載であるが、「蛛の糸巻」とではその内容に幾分か違いがある。特に傍線部に注目いただきたい。

けふのおまつりは大評判なり、天気はよし、内に居玉ふ日にはあらず、われらがゆくさきは親類なり、いざいざとす、められおのがめこ（傍注―妻子）らもゆく心なりしが、不思議の事ありてゆかざりしに、誘ひしもの、（傍注・細註―神田

「辺の医師」娘十三歳、下女十八歳、二人溺死せり、此時さそひにしたがひなば、今日の顔は見られませし

今は新版燕石十種本（中央公論社）に従ったが、国会図書館に所蔵される京山自筆稿本でも差異はない。だとしたらこの違いをどう考えるべきか。

おそらく誘った人物を取り違えている点からも、「蜘蛛の糸巻」は「夢のうき橋」を参照していないと考えられる。その執筆姿勢は、過去に記した資料に従うというのではなく、自分の記憶に従ったものであるといつてよろしかろう。必然「蜘蛛の糸巻」本文にある種の「虚構」化がなされ得るとしてよいのではないか。意識的であるのか否かは今は問わない。ただこの場合には、惨事から年月を経て記述した時に、「不思議の事」という神秘的な力によって自分たちが助かったのだという「虚構」化がなされているのである。極論ながら、不可思議な因果によって、自分たちが惨事から助かるという構成の中に、「物語」の萌芽を読み取ることも可能であろう。

それにしてもこうした対照しうる資料が存在したことによって、「蜘蛛の糸巻」の内容にどれほどの信憑性をみることができなのか、改めて考えなくてはなるまい。とくに馬琴について京山が批判している箇所などは、従来幾度となく引用されてきたわけであるが、その資料としての位置づけは、例えば京山の馬琴嫌いからの意図的な曲筆という観点から捉えられていたように思われる。確かにそういつた側面は否定できないものの、永代橋落橋という惨事について、事故当時の文章と四十年経た文章とで、ここに示したような差異が存在したことを考えるなら、もつと時間的間隔のあく事柄の場合には、無意識での「虚構」化がなされている

京伝「夢のうき橋」紹介

る可能性を考慮する必要が生じるのではあるまいか。問題は資料的信憑度をどう考えるか、なのである。

今回は資料の翻刻と若干の考察を試みたわけであるが、この資料からうかがえることはまだあるように思う。後考を期すことにしたい。

※尚、この永代橋落橋に関して、京伝の合巻との関わりについて、別に拙稿（「夢の憂橋—永代橋落橋一件始末—」『国文論叢』19号）がある。参照いただきたい。

※資料の翻刻を許可してください。大府立夕陽丘図書館に厚くお礼申し上げます。

※翻刻について付記するならば、13丁表および15丁表から18丁裏の枠上部の書き入れ、さらに19丁表の巴山人印は朱で記されている。

（本学専任講師）